

Yuji Takahashi

Horses Heads were
toward Eternity

for
Alto Flute in G
and
13-string Koto

1988

馬の頭は永遠に向かった

アルト・フルートと箏のために

高橋悠治
1988

Because I could not stop for Death—
 He kindly stopped for me—
 The Carriage held but just Ourselves—
 And Immortality.

We slowly drove —He knew no haste
 And I had put away
 My labor and my leisure too,
 For His Civility—

We passed the School, where Children strove
 At Recess —in the Ring —
 We passed the Field of Gazing Grain —
 We passed the Setting Sun —

Or rather —He passed Us—
 The Dews drew quivering and chill —
 For only Gossamer, my Gown—
 My Tippet —only Tulle—

We paused before a House that seemed
 A Swelling of the Ground—
 The Roof was scarcely visible —
 The Cornice —in the Ground —

Since then—'tis Centuries—and yet
 Feels shorter than the Day
 I first surmised the Horses' Heads
 Were toward Eternity— (712)

Emily Dickinson

待ってはいられなかったので
 しんせつなお迎えがきた
 くるまには二人だけ
 そして永遠

ゆっくり走った——あわてずに
 その礼儀正しさにこたえるために
 しごとあそびも
 なげだした

通り過ぎた学校は休み時間
 こどもたちが競技に夢中
 通り過ぎた麦畑に見つめられ
 通り過ぎた沈む太陽

それとも太陽が通り過ぎた——
 露が呼ぶ震えと冷たさ
 蜘蛛の糸まとい
 薄い絹かけて

家の前にとまったら
 それは土の塚で
 屋根もなく
 蛇腹も土の下だった

それから——何百年も
 短かった
 馬の頭が永遠に向かったと
 はじめて思ったあの日より (712番)

エミリー・ディキンソン

(高橋悠治・訳)

A1

Koto solo-example²

Koto

The musical score is written on eight staves. Each staff begins with a treble clef and a key signature of one sharp (F#). The music is a continuous melodic line with various rhythmic values, including eighth and sixteenth notes, and rests. The notation includes many beamed notes and some slurs. The word "Koto" is written at the beginning of the first staff.

A2
example

Alto Flute in G

Oen tempo

Koto

A. Fl.

Koto

A. Fl.

Koto

A. Fl.

Koto

B/1

B
example

Alto Flute in G

Koto

A. Fl.

Koto

A. Fl.

Koto

A. Fl.

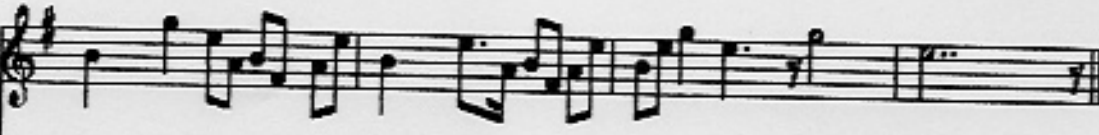
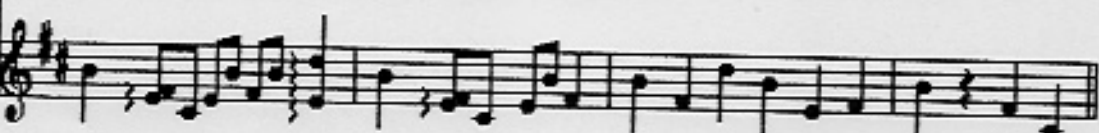
Koto

6.

B/2

A. Fl.  Koto 

A. Fl.  Koto 

A. Fl.  Koto 

17.

C1/1

C1

example

Alto Flute in G

Koto

A. Fl.

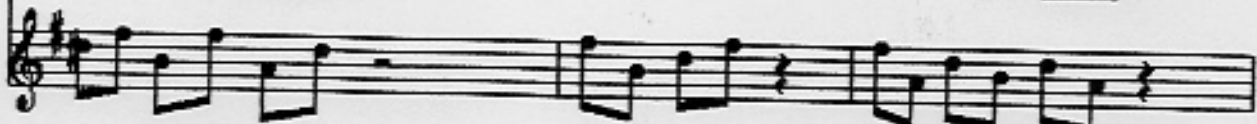
Koto

A. Fl.

Koto

C1/2

A. Fl. 

Koto 

A. Fl. 

Koto 

A. Fl. 

Koto 

A. Fl. 

Koto 

C2

example

Alto Flute in G

Koto

A. Fl.

Koto

A. Fl.

Koto

A. Fl.

Koto

C3

example

Alto Flute in G

Koto



A. Fl.

Koto



A. Fl.

Koto



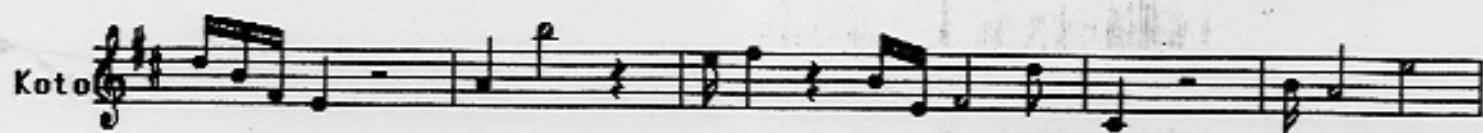
A. Fl.

Koto



D

Koto cadenza-example



E

example

Alto Flute in G

port.

flutter

Koto

port.

R. Fl.

Koto

R. Fl.

Koto

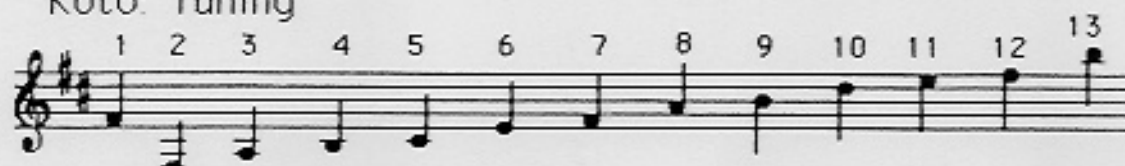
R. Fl.

Koto

Ending

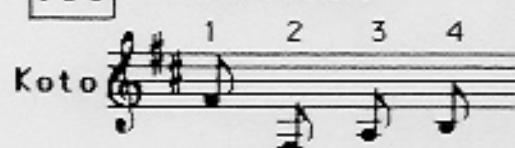
Plan

Koto: Tuning



A1

Materials



Example

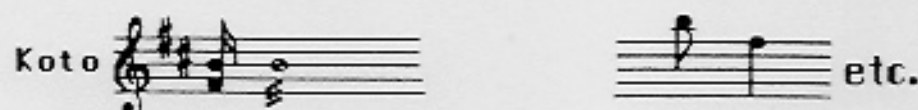
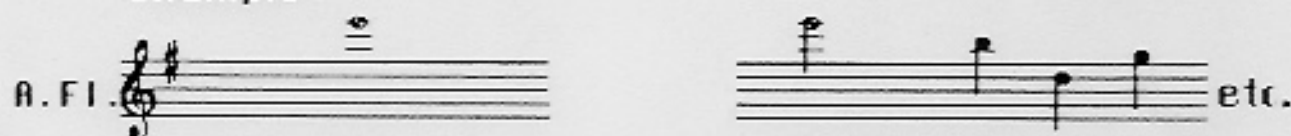


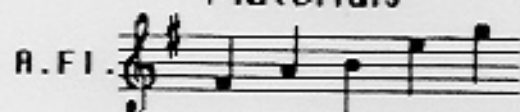
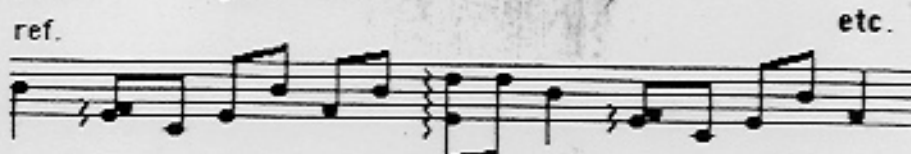
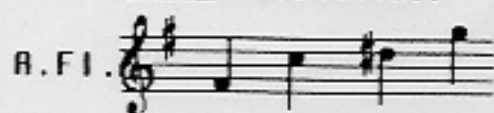
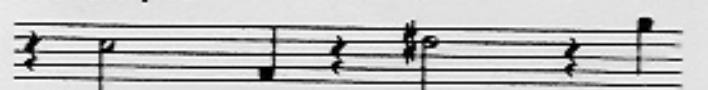
A2

Materials

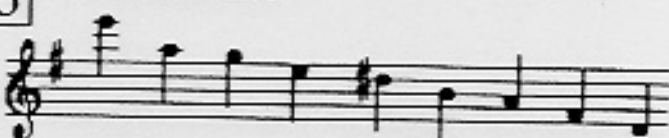


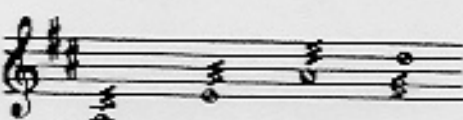
Example



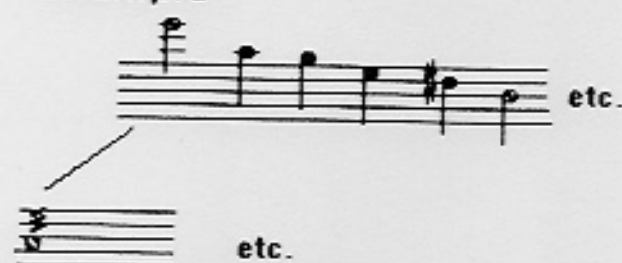
B**Materials****Example****C1****Materials****Example****C2****Materials****Example**

C3 Materials

A.F.I. 

Koto 

Example

 etc.

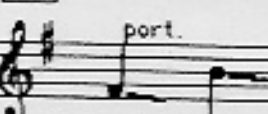
D Materials

Koto 

Example

Koto  etc.

E Materials

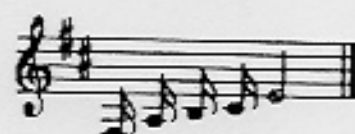
A.F.I.  port.  flutter

Koto  port.

Example

 etc.

Ending:

Koto 

◇前提——演奏家が書かれた音符や指本を守ろうとすると、作品の不完全な再現しかできなくなる。現代音楽の演奏の殆どが楽譜をよむだけに終わってしまふばかりが、作曲家はストラヴィンスキーからケージにいたるまで、演奏家の即興や自発性を排除してきたおかげで、創意のない演奏者に対する内心の不満を抑えていなければならない結果になった。ここでは、音楽はその場で演奏するためのものであり、作曲とはその手順を定めることにすぎないと考えよう。

◇楽器と調弦——箏とフルートのための音楽がフルートのメロディーに箏で伴奏を付ける『春の海』にならないために、フルートと箏が同時に同じメロディーを演奏することを思いつく。そのために同じ音域の十三弦とアルト・フルートを選び、さらに共通のコードを選ぶ。箏は夏山調子の変形に調弦する。フルートはそれに二、三の固有のコードを付け足す。

◇構成——エミリー・デクサンソンの死についての詩を選び、それによって曲を構成する。ことばによるのは、音楽的な展開を断ち切るため。詩は次のとおり——

待つてはいられなかったので／しんせつなお迎えがきた／くるまには二人だけ／そして永遠／／

ゆっくり走った——あわてずに／その礼儀正しさに／たえるために／しごとまあそびも／なげだした／／

通り過ぎた学校は休み時間／こどもたちが競技に夢中／通り過ぎた表畑に見つめられ／通り過ぎた沈む太陽／／

それとも太陽が通り過ぎた——／露が呼ぶ暖さと冷たさ／蜘蛛の糸まとい／薄い絹かけて／／

家の前にとまったら／それは土の塚で／屋根もなく／蛇腹も

土の下だっだ／＼

それから——何百年も／＼短かった／＼馬の頭が永遠に向かっ
たと／＼はじめて思っただあの日より (7—2番)

エミリー・ディキンソン (高橋悠治・訳)

◇手順——詩に沿って八つの部分に分かれた曲の構成と、各部分の基本的パターンを考える。パターンでたいせつなのは、使うどっちを制限することだ。たくさんの音を使ったり、うごきまわるパターンを即興で演奏するためには、伝統的な訓練か、人工的なスタイルや複雑な規則が必要になる。特殊な能力を持つ演奏者の名人芸は、結局聞き手を疎外するにいたる。

さて、それらのメモを持って、キーボードの前に座り、箏とフルートに近い音色を選んで、即興的に演奏し、コンピューターに記録し、楽譜を書かせる。これが各部分の実例となる。それをカセットに録音する。

ただし、実例は楽譜を見ながら参考カセットを聴いたり、練習するためで、演奏家がパターンの特徴をつかんだら、それに基づいて演奏するために、演奏用の設計図を別に作る。これもコンピューターの楽譜プログラムによって書く。これで作曲は全部終わった。

◇結果——こうして作曲、演奏、即興は共通の環のなかで収斂していく。ただし、違いはどこまでも残る。作曲は繰り返して耐える手順を作り、即興は二度と繰り返されない。演奏は作曲に多様な読みの可能性をもたらす、作曲は演奏に未知の可能性をひらく。演奏は技術であり記憶であるが、即興は発見であり逸脱である。とれが欠けても創造のよろこびはうしなわれる。

楽譜と音響はコンピューターの介在によって距離を縮めつつある。ここでも音にならない何かと紙に書けない何かの違いはいつまでも残らなければならないだろう。